

平成 21 年 5 月 29 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007 ～2008

課題番号：19530702

研究課題名(和文) 子ども同士のトラブルに保育者はどう関わっているか—「人間関係」の指導に関する研究

研究課題名(英文) How Do Kindergarten Teachers Cope with Children's Conflicts - Teaching Method for 'Human-Relationships' Area in Early Childhood Care and Education

研究代表者

友定 啓子 (TOMOSADA KEIKO)

山口大学・教育学部・教授

研究者番号：20091184

研究成果の概要：508 事例のトラブル場面の保育記録を分析したところ、トラブルの原因は 7 分類され、幼児の年齢による違いが認められた。保育者のかかわりは 17 分類され、保育者は子どもの状態に合わせて、複数のかかわりを用いており、経験年数により特徴があることが認められた。これらから、トラブル場面の保育的意義は、①子どもの自己回復を支える、②共生の経験を支える、③解決法を学ぶ、④価値や規範を学ぶ、の 4 点にあるとまとめられた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：保育・人間関係・保育者・トラブル・幼児

## 1. 研究開始当初の背景

現代の子どもたちが人とかかわる上で困難を抱えていることは多方面から指摘されている。幼児教育においても、入園前に同世代の子どもと触れる体験が減少し、園生活においてもよりいっそう配慮を要する状態になってきている。

本研究で取り上げた幼児同士のトラブル場面は、従来から、幼児が人とかかわる力を育む上で重要視されており、2008 年改訂の

新幼稚園教育要領においてもたびたび言及されているもののひとつである。しかし、これまでの保育研究において、このトラブル場面は幼児の人間関係の指標として取り上げられることはあっても、幼児の発達においてこの場面がどのように重要であるのか、あるいは保育者が実際にどのようにかかわっているのかについては明らかにされてこなかった。この場面の保育的意義を明らかにすることによって、保育者たちが「人間関係」の

指導について、いっそう意味をもってとらえ直すことができると考えた。

また、この場面は保育者養成校の保育実習において学生が多く不安を感じる場面でもあり、事前に学ぶ教材が必要であった。その際、個別の事例紹介だけでなく、原理原則を明らかにしながら、具体的な事例について考えることのできる教材が求められている。

## 2. 研究の目的

保育内容「人間関係」の指導にかかわる典型的な保育場面として「子ども同士のトラブル場面」を取り上げ、それに保育者がどうかかわっているかについて、保育者自身による保育記録を主データとして、その量的・質的分析を行い、保育者のかかわりの理論的枠組を明らかにする。またそれらが保育経験年数によってどのように変化するかを分析し、保育者の熟達の過程を明らかにする。

## 3. 研究の方法

保育者及び保育学生に、「子ども同士のトラブル場面」にかかわった記録の作成依頼をした。東京地区及び山口地区の幼稚園教諭135名（280事例）、保育学生110名（228事例）計245名の508事例が収集された。内訳は、2歳児32例、3歳児101例、4歳児163例、5歳児174例、異年齢38例であった。

これらをデータベース化し、トラブルの原因・保育者のかかわりなどを、子どもの年齢・保育者の経験年数によって分析した。記述をコード化し、エクセルおよびSPSS統計パッケージで統計的分析を加えた。さらに、保育者への聞き取り調査及び典型事例の考察を行った。

## 4. 研究成果

### (1) 保育記録の統計的分析

#### ①トラブルの原因と年齢比較

トラブルの原因は7分類され、「不快な行為」がやや多いものの、際立って多いものはないことがわかった（図1）。なお、これらのうち、「取り合い」については、年齢とともに減少し、「不快なことば」と「遊びや生活のルール」をめぐるトラブルは、3歳が有意

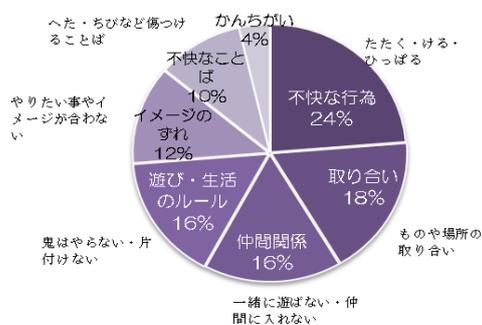


図1 トラブルの原因

に少なかった。（図2）。

#### ②トラブルへ介入するきっかけ

保育者がトラブルに介入するきっかけを見ると、保育者が子どもの様子に気付いて介入するものが54%、子どもの訴えで介入したものが30%、保育者の目の前で起こったものが16%であった。保育学生は子どもからの訴えが少なかった。

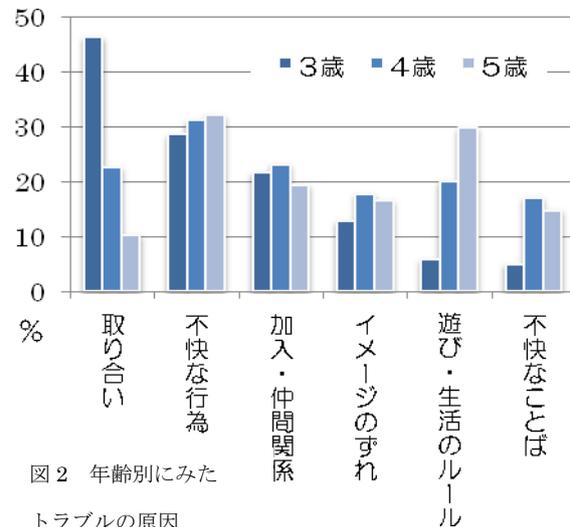


図2 年齢別にみた

トラブルの原因

#### ③保育者のかかわり

保育者のかかわりは、17種類を抽出し、保育者の意図に着目し、以下の4つに分類した。

##### i 自己回復を支える

1 気持の受け止め/2 身体制止/3 認める・ほめる/4 場面切り替え/5 見守る・待つ

##### ii 共生の経験を支える

6 交渉・話し合いの提案/7 気持・要求の代弁/8 謝罪の提案/9 仲直りの提案

##### iii 解決法を子どもと一緒に探す

10 状況の把握/11 状況・原因を尋ねる/12 状況を子どもに説明する/13 子どもに相談/14 子どもが解決/15 解決策の示唆・提案

##### iv 価値・規範を伝える

16 説諭/17 説得

#### ④保育者のかかわりと子どもの年齢

かかわりの頻度については、「状況・原因を尋ねる」「気持・要求の代弁」「状況を子どもに説明」「説諭」「気持の受け止め」が多く用いられていた（図3）。このうち、「気持・要求の代弁」「状況を子どもに説明」「解決策の示唆・提案」は年齢が低いほど多く、「見守る・待つ」は4歳児に多く、「説得」は4歳児で少なかった。

#### ⑤保育者の経験年数とかかわり

保育者の経験によって、以下のような特徴が認められた。保育学生は、目の前でトラブ

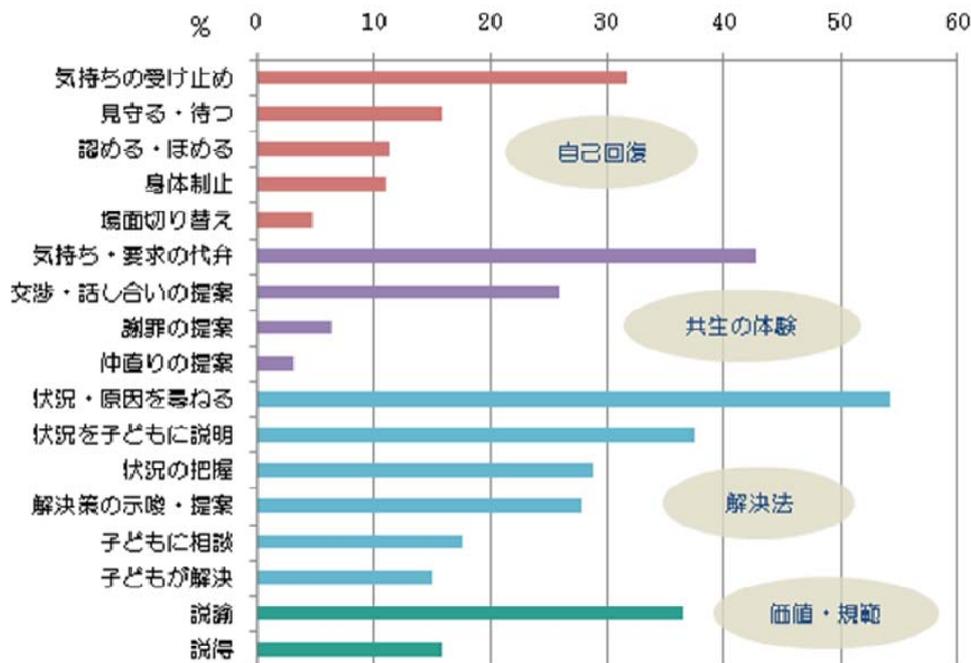


図3 保育者のかかわりの種類と頻度

ルが起こる・子どもは訴えてこない・かかわりの種類が少ない。経験 2~4 年では、説諭が多い・目の前でトラブルが起こる・その場で解決しようとする。5~10 年では気持ちの受け止めや状況の把握が多い・説得は少ない・子どもの発達課題に関する記述が多い。経験 10 年以上では、「その場の解決にこだわらない・かかわりの種類が多い・まわりの子どもと一緒に解決しようとする・子どもの発達課題に関する記述が多い。

以上のほかに双対尺度法により、各要因間の関連を見た。

#### ⑥トラブル場面の保育的意義 (図4)

保育者のかかわりの分類や意図をもとに、トラブル場面の保育的意義は、保育者がかかわることで、子どもたちは以下の体験をすることにあるとまとめられた。

##### i 自己回復の体験

トラブル場面は、子どもにとって不本意な場面である。子どもはそこから立ち直らなければならない。保育者が子どもの否定的状態を受け止め、気持ちを支えることによって、子どもは一歩進んで自分をコントロールして問題に取り組むことができる。多くの保育者は子どもが自身で問題に取り組むことができるように、子どもの気持ちを受け止め、共感しながら、身体的・心理的基盤を整えることを重視している。

##### ii 共生の体験をする

トラブル場面で重視されていることは、子どもが自分の思いを言葉で表現すること、また相手の表現を受け止め理解することであ

った。この過程はことばで表現することの重要性を体験し、コミュニケーションの力を育てるとともに、互いにわかり合うことができることやそのうれしさを通して、他者と自分への信頼感を育てることを重視していると考えられた。トラブルの根底には相手に対する関心があるととらえ、子どもたちの思いをつないでいくこと、すなわち共生の体験になるようにしているといえる。

##### iii 解決法を学ぶ

保育者はトラブルの原因や状況を聞いたり、子どもに分かるように説明したり、解決の方法を相談したり、保育者の方から解決策を提案したりしていた。トラブルの内容は多岐にわたり、子どもの状態や解決のための条件も多様であり、したがって解決法も多様である。子どもたちは状況に応じた具体的な解決を体験することによって、解決法のストックをつくとともに、具体的な場面で考えていく力をつけることができる。トラブル場面は課題解決的思考を育てる場にもなってい

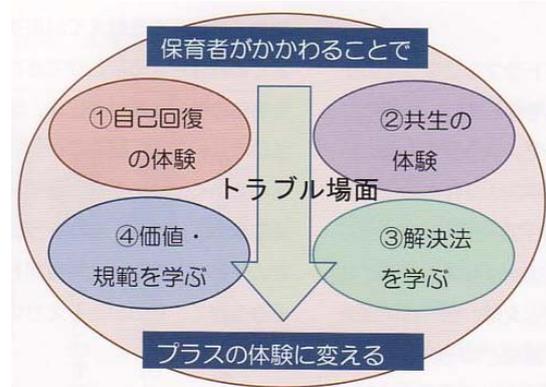


図4 トラブル場面の保育的意義

る。多様な解決法を体験することで、年長児になると自分たちでトラブルを回避、解消、解決ができるようになっていく。

#### iv 価値や規範を学ぶ

保育者は、トラブル場面で色々なこと言いきかせていた。トラブル場面において、保育者の願いや思いを伝え、他者の心や体を傷つけてはいけないこと、許すことや譲ることなど人と一緒に生活していくための規範（善悪・価値・文化）や考え方などを伝えていた。また、トラブルの当事者だけでなく、周囲の子どもたちが、保育者がトラブルにどのようにかかわるかを見て、もののとらえ方や規範を学ぶ機会になっている。

#### (2) 保育者への聞き取り調査

保育記録提供者の中の12名について、その記録の補足と、トラブルへのかかわり全般に関するインタビューを実施した。その内容を音声記録に取り、保育事例集『「ごめんね」の向こうに』およびブックレット「子ども同士のトラブルに保育者はどうかかわっているか」に、保育記録に即して掲載した。

主な内容は、その場面での保育者の思い、その子どもについてのとらえ、トラブル一般に関する年齢的な特徴、かかわりで注意していることなどである。

#### (3) 事例考察

3歳から5歳までの年齢ごとの特徴を考慮しながら、原因別に典型的な事例をあげ、考察を加えた。3歳については、ものの取り合いとイメージのずれを取り上げ、保育者のかかわりを考察した。4歳児については仲間関係をめぐるトラブルと、遊びのルールに関するトラブルを取り上げた。5歳児については、言葉のトラブル、不快な行為、遊びのルールについて取り上げた。また、2歳児の事例や異年齢の子どもとのかかわり、保育学生のかかわりについても考察した。

#### (4) 保育テキストの作成・発行

##### ① 保育事例集の発行



収集した保育記録から、年齢ごとに7例、計21例の記録を選択した。事例ごとに2ページ仕立てとして、保育記録本文を中心に、保育者の思い・保育者へのインタビュー・コメントを加

えた。さらに、研究者のメッセージやコラムを加え、計50ページ(A4判)の事例集を作成した。2008年3月に、1000部発行し配布した。

##### ii. 保育ブックレットの発行

保育事例の統計的分析の結果と理論考察などを加え、理論・データ編(8ページ)とし、各年齢・原因ごとに事例を選択し、事例編(15事例、14ページ)を加えて編集した。

2009年3月に3000部発行し配布した。

保育者養成校での授業、保育者の現職研修に活用し、また、2009年の日本保育学会で自主シンポジウムを開催した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

① 入江礼子、子どものトラブル体験を支える保育者—保育者がかかわった子どものトラブル事例から考える—、保育の実践と研究、13巻3号、31-36、2008

② 友定啓子、保育者が自らの技量と向き合うということ—子ども同士のトラブルへのかかわりから—、季刊保育問題研究、231号、64-74、2008

③ 小原敏郎、入江礼子、白石敏行、友定啓子、子どものトラブルに保育者はどうかかわっているか—保育者の経験年数・トラブルが生じる状況による分析を中心に—、乳幼児教育学研究、第17号、93-103、2008

④ 白石敏行、友定啓子、入江礼子、小原敏郎、子ども同士のトラブルに保育者はどうかかわっているか—学生の保育記録の分析結果—、山口大学教育学部研究論叢、第57巻第3部、287-299、2007

⑤ 友定啓子、白石敏行、入江礼子、小原敏郎、子ども同士のトラブルに保育者はどうかかわっているか—「トラブル場面」の保育的意義—、山口大学教育学部研究論叢、第57巻第3部、117-128、2007

[学会発表] (計7件)

① 小原敏郎・入江礼子・友定啓子・白石敏行、子ども同士のトラブル場面を用いた実習指導の教育的意義—学生が保育記録



に記述した「ふりかえり」に着目して一、日本保育学会第 62 回大会、2009.5.16、千葉大学

②白石敏行・友定啓子・入江礼子・小原敏郎、子ども同士のトラブルに保育者はどうかかかっているか(4)一保育記録からの学び一、日本乳幼児教育学会第 18 回大会、2008.11.29、大阪キリスト教短期大学

③小原敏郎・入江礼子・友定啓子・白石敏行、子ども同士のトラブルに保育者はどうかかかっているか(3)一トラブルの原因とトラブルが生じる関係状況との関連一、日本乳幼児教育学会第 18 回大会、2008.11.29、大阪キリスト教短期大学

④入江礼子・小原敏郎・友定啓子・白石敏行、子ども同士のトラブルに保育者はどうかかかっているか一保育記録から見たトラブル原因の年齢比較一、日本保育学会第 61 回大会、2008.5.18、名古屋市立大学

⑤友定啓子 子ども同士のトラブルに保育者はどうかかかっているか一発達経験としてのトラブル場面の意義、日本保育学会第 61 回大会、2008.5.18、名古屋市立大学

⑥入江礼子・小原敏郎・白石敏行・友定啓子、子ども同士のトラブルに保育者はどうかかかっているか (2)、日本乳幼児教育学会第 17 回大会、2007.8.18、東京学芸大学

⑦白石敏行・友定啓子・入江礼子・小原敏郎、子ども同士のトラブルに保育者はどうかかかっているか (1)、日本乳幼児教育学会第 17 回大会、2007.8.18、東京学芸大学

〔図書〕(計 3 件)

①友定啓子・入江礼子・白石敏行・小原敏郎、ブックレット「子ども同士のトラブルに保育者はどうかかかっているか一500 枚の保育記録から」、2009

②友定啓子・入江礼子・白石敏行・小原敏郎、保育事例集「ごめんね」の向こうに、2008

③入江礼子、新保育シリーズ保育内容人間関係第 9 章「トラブルの中で成長する」、光生館、122-135、2008

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

①友定啓子・入江礼子・岸井慶子・大森洋子・

白石敏行・小原敏郎、子ども同士のトラブルの保育者はどうかかかっているか、日本保育学会第 62 回大会自主シンポジウム、2009.5.16、千葉大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

友定 啓子 (TOMOSADA KEIKO)  
山口大学・教育学部・教授  
研究者番号：20091184

### (2) 研究分担者

入江 礼子 (IRIE REKO)  
共立女子大学・家政学部・教授  
研究者番号：50288099

白石 敏行 (SHIRAIISHI TOSHIYUKI)  
山口大学・教育学部・准教授  
研究者番号：10259327

小原 敏郎 (OHARA TOSHIO)  
研究者番号：30439161  
共立女子大学・家政学部・講師

### (3) 連携研究者 なし